



写真上から）幼稚園の運動会で亜紀子さんと。この園で地震を経験する▶小学校3年生の時に、隆直さんと訪れた吹割の滝。よく2人で歴史散策を楽しんだ▶塩野さんとともに所属している卓球部。力強い「スマッシュ」を決める



塩野大志君
—沼田東中3年・写真左—

受賞しました。「大志君がいてくれたから素を出せるようになり、下を向いていた自分が今では人に話し掛けるほどに変わりました」と話します。

感謝をリレーで届けたい

自信を持ち、充実した日々を過ごすようになった悠紀君は、学校でランナー募集の話を聞くと「古里の祖父母に元氣な姿を届けたい」と迷わず応募。悠紀君の思いに心を動かされた隆直さんも企業枠に応募し、父子の聖火ランナーが実現しました。

隆直さんは30日の桐生市を走り、自分たちを快く受け入れてくれた地域の人への感謝や福島と同僚や友人への思いを胸に、明るい気持ちで聖火をつなぎました。翌日、聖火を受けた悠紀君は「笑顔で走ろう」と決

めて大役を果たすと、祖父母からは「元氣な姿がありがとう。勉強を頑張って」と励まされたといいます。「祖父母への感謝の気持ちに加え、沿道の応援にも温かさを感じました。これからも沼田を愛していきたいです」と力を込めました。

悠紀君は両親と兄の4人家族。コロナ禍での東京2020大会開催に対してさまざまな意見がある中、家族も葛藤を抱えてきました。亜紀子さんは「笑顔で走る姿を見届けられてよかった」と安堵を見せ、兄・将英さんは「無事に走り終えてホッとししました」と話しました。

沼田が好き 希望の道をつくる

一家が沼田で暮らすようになり10年。悠紀君は自然に恵まれ景観がよ

く、歴史ある風土が沼田の良さと感じています。自宅の近くから見える河岸段丘の階段状の大地の造形や、四季折々の美しさを見せる吹割の滝がお気に入り。幼い頃からよく訪れていました。「河岸段丘はグランドキヤニオンのようで、多くの人に知ってもらいたい。街なかの大正ロマンの歴史建築も好き。豊富な資源を上手に生かして観光のまちになってほしいです」と期待を膨らませます。沼田の暮らしも合っていると話し「大人になっても住み続けたいです。家族や大志君、たくさんの方の支えのおかげで充実した毎日があり、リレーに挑戦できました。震災も貴重な経験。福島への思いや古里で暮らす祖父母への感謝を心に、今いる場所で自分らしく希望の道をつくっていききたいです」と笑顔でした。

リレーをサポート 良き友情を育みたい

木幡君が聖火ランナーに決まったことを知ったときは嬉しくて「サポートランナーとして支えたい」と手を挙げました。リレー当日の木幡君は自信に満ちて格好良く、私も元気をもらいました。一緒に走れたことを改めて幸せと感じています。

木幡君の第一印象は「素敵な笑顔」。授業や部活で毎日過ごすうち

に、気が付けばいつも隣にいました。ペアを組んだ英語のスピーチコンテストでは、大勢の人の前でも、いつもどおりの自分でリラックスして披露できたのは、楽しく励まし合いながら練習できたからと感謝しています。これからも支え合い絆を深め、大人になって違う道を歩んでも、良き友情を育んでいきたいです。



下久屋町の自宅前で家族写真。父から子ヘーチキスのポーズを決める。
【写真左から】母・亜紀子さん、父・隆直さん、悠紀君、兄・将英さん



特集 東京 2020 オリンピック聖火リレー

二つの古里へ希望をつなぐ

東京 2020 オリンピック聖火リレーが3月30日から2日間、県内各地で行われ、31日は沼田市内を走り、希望の炎をつなぎました。白いユニフォームに身を包み、聖火を片手に沿道の応援に笑顔を向ける木幡悠紀君（沼田東中・3年）は、沼田のスタート地点となる沼田公園を駆け抜けました。「沼田と福島の二つの古里を希望でつなげられ、感謝の気持ちでいっぱい」とすがすがしい表情を浮かべていました。

大志君との出会いが自信に

悠紀君は慣れない土地で暮らす不安や引込み思案な性格から、新しい生活に馴染めずにいました。悶々とした気持ちがある一方で、楽しい時間はインターネットを使うことでした。小学校卒業前、クラスメートの塩野大志君とインターネットの何気ない話が弾んだことがきっかけで、悠紀君の心が少しずつ変化。中学生になってからは何でも話せる関係になり、同じ卓球部で毎日を共に過ごしています。市の英語のスピーチコンテストではペアを組み、家族に立派な姿を披露。ベストパフォーマンス賞を

震災を経験 移住を決断

悠紀君は福島県南相馬市の出身。東日本大震災の避難で一家は10年前に沼田へ移住しました。震災当時、悠紀君は幼稚園に通っており、父の隆直さんと母の亜紀子さんが園に迎えに行ったときに地震が発生しました。「このまま大きな被害になると思わなかった」と隆直さんは話し、津波や東京電力福島第1原発事故の放射能の恐怖などで、命の危険を感じてきたといいます。家を流された同僚や親戚も次々と避難を始め、木幡さん一家も福島を離れることを決断。選んだのは亜紀子さんの故郷の沼田でした。